

『碧巖録抄』の諸写本について

安 藤 嘉 則

一、はじめに

いわゆる「宗門第一書」として知られる『碧巖録』は、中世禅林においては洞済の別なく参究されている。その参究の仕方には講義・提唱に基づく場合と、室内の密参において各公案を商量していく場合とがあり、こうした中から、臨済宗の五山派や林下の徹翁派（大徳寺派）や関山派（妙心寺派）、幻住派などの諸派、そして曹洞宗系の諸派において多くの抄や密参録といわれる文献が多数成立している。

今日に伝えられる『碧巖録』の抄や密参録の典籍数について、筆者が管見する限りではあるが、文献の数としては抄の方が密参録よりも多いようである。無論密参録は室内における公案商量の模範的な著語を示したもので、師資間の公案問答の解答を秘密相伝した資料である。したがって、その文献的性格から後代まで伝承保存する可能性の低い資料であるだけに、必ずしも現在の資料数ではその実態を反映しているとはいえないが、大抵は一卷で収録される『碧巖密参録』に対し、

十巻におよぶ膨大な抄が曹洞宗も含めた禅宗各派において多数成立していることは、やはり『碧巖録』が中世当時「宗門第一書」として中心的な位置を占めていたことを反映しているといえるであろう。

ところでこうした『碧巖録』に対する抄の刊本・写本を含めた文献的情報については次の業績が特筆されるであろう。

- (1) 金田弘「松岡文庫禅籍書目解題・稿——碧岩録抄・臨済録抄・無門関抄・五家正宗賛抄・虚堂録抄・各種密参録など——」(『国語研究』「国学院大学国語研究会編集」第三十七号、三九―五四頁に所収)⁽¹⁾

- (2) 柳田征司「臨済系『碧巖録抄』の諸本について」『愛媛大学教育学部紀要 第II部 人文・社会科学』第二四巻第二号

(1)の金田弘氏による研究は松ヶ岡文庫蔵に所蔵される臨済系・曹洞系の『碧巖録抄』十六点が紹介されており、単に写本情報を列挙するのではなく、同類系統の写本に整理されて提示されている。また、こうした松ヶ岡文庫蔵の資料をも含め、各地に所蔵されている『碧巖

録抄』について総合的なリストが提示されているのが(2)の柳田征司氏による研究である。この柳田氏のリストは徹翁派と関山派の『碧巖録抄』について二十五種に分け、それぞれ写本の内容を確認した上で、この二十五種類に同類の写本を整理して紹介し、さらに二十六番目には「仮名抄であるかどうか未詳」として一括された写本群十一点が言及されている。この柳田氏による研究は、臨済系の『碧巖録抄』について、個人蔵や寺院資料をも含め、現在われわれが知ることができる最も多くの情報を提示するものである。

この他に『碧巖録抄』について特筆される研究は次の研究である。

(1) 古田紹欽「松ヶ岡文庫所蔵 禅籍抄物集解題」岩波書店、

(昭和五十一年)

(2) 飯塚大展「大東急記念文庫蔵『碧岩録古鈔』について」『曹

洞宗研究員研究紀要』第二十四号(平成五年)

(3) 飯塚大展「大徳寺派系密参録について(三)——『碧巖録龍

嶽和尚秘辨』を中心に——」『曹洞宗研究員研究紀要』第二十

五号(平成六年)

(1)は古田紹欽氏による松ヶ岡文庫蔵の抄物の影印刊行における解題の中に所収される「碧巖録抄」の項の論考であり、特に後述する『臆断』系の諸写本の中で、影印した松ヶ岡文庫クハ四の虎哉宗乙講の写本と甲本(ハ一一四〇)と乙本(ハ一一四三)の二写本との対照研究がなされている。

また(2)の飯塚大展氏による研究は大徳寺派系の『碧巖録抄』の翻刻を含む研究であり、(3)は『碧巖録』の龍嶽宗劉の密参録の翻刻を

含むものである。このうち後者の二、「語録抄の基盤」という項目では、『碧巖録抄』の前提となった五山派における『碧巖録』の講義を伝える記録が紹介され、また妙心寺派系の『碧巖録抄』である臆断系の写本四種が紹介されている。この四写本の内の二種、すなわち駒澤大学「一八八・八四・三〇五」蔵『碧岩録抄』(写本、一〇冊)と竹本氏東久邇文庫蔵『碧岩録抄』は前出の柳田氏のリストにも見られぬ資料である。

さて本稿では、こうした『碧巖録抄』に関する先行研究をふまえながら、これまで紹介された資料に若干の補足をくわえ、また特に妙心寺派(以下、関山派)の臆断系の『碧巖録抄』については多数ある写本について対照研究をふまえて、より細分化した系統別の分類整理を試みるものである。

二、『碧巖録抄』の写本に関する覚え書き

前述の如く、金田弘氏・柳田征司氏・飯塚大展氏による研究によって、現存の『碧巖録抄』資料についてかなり紹介されているのであるが、特に柳田征司氏によるリストは、扱われる点数も七十点を超える精力的な研究であり、筆者もこの柳田氏のリストによって多くの情報を得ている。このリストは『碧巖録抄』について研究する上で不可欠な学術的成果であるといえるだろう。こうした学恩を被りながらも以下において、筆者が気づいた点、補足する点等が若干見出せるので以下に覚え書きとして述べてみたい。

まず最初に五山派系の『碧巖録抄』として次のような資料を補足として提示したい。

(1) 『碧岩大抄』、松ヶ岡文庫蔵(クハ・二五)、写本、三冊、表紙右に「ホ」とあつて「碧岩大抄」とある。九行の罫線が引かれて、碧巖本文は大字で、抄文は二行の割注となっている。

(2) 『碧巖録抄』、正法寺(岩手県水沢市)蔵、写本、二冊、各表紙に「四卷之内」とあり、各表紙見返しに「當寺六代儀庵妙順和尚置之」とある。第一冊目の奥書には「此抄ハ當山之常住也。先哲久御覽也、於向後里中之衆可畏也 上野之則焉之筆也、續灯庵公用 妙順奇進」、第二冊目の奥書には「續灯庵公用 妙順奇進」とある。本写本は第一冊目が『碧巖録』第二十一則から第五十則、第二冊目が第五十一則から八十則まで扱われている。したがって本来四冊本であったものの第二巻と第三巻に当たるのが残されているのであるが、内容は前出の『碧巖大抄』とまったく同じである。

この松ヶ岡文庫蔵の『碧巖大抄』はすでに拙稿で検討したのであるが、蓬左文庫蔵の文安二年の『碧巖録抄』と同じ系統の五山系の抄であり、いわゆる岐陽方秀の『不二鈔』や竺仙梵僊の抄の系統とは別の系統と考えられる貴重な写本である。

しかるにこの五山派の『碧巖録抄』が曹洞宗の正法寺に儀庵妙順(永正元年「二五〇四」)の頃に伝えられている。この無底良詔(一三六一年叙)を祖とする正法寺の一派は、峨山下の二十五哲の門流の中でも一種独立独歩の流れを形成していたのであり、「奥の正法寺」は

永平寺・總持寺と並んで瑞世転衣の出世道場となっている。こうした無底一派が他の峨山派との交流も希薄な状況にありながら五山系の『碧巖録抄』を保持していたことは誠に興味深いものがある。

次に柳田征司氏のリストで掲げられている「一、大智祖繼抄カ碧岩集抄」についてであるが、柳田氏の御指摘の通り、松ヶ岡文庫蔵のクハ二八の「碧岩補闕抄」(写本、一冊)と神宮文庫蔵(写本、一〇冊)は同一系統の写本である。

松ヶ岡文庫蔵は本文四〇丁で、表紙に「碧岩補闕抄 全」、表紙裏に「臨滹山大仙寺常住本」とあり、美濃大仙寺(岐阜県八百津町)旧蔵の写本である。その奥書に「碧岩集卷之 右江州岐陀開山大智和尚抄 於豆州奥守福寺出之トアリ」と記されている。この「豆州奥守福寺」は不明であるが、筆者は静岡県南伊豆町湊に所在する修福寺(曹洞宗)であると推測している。この松ヶ岡文庫蔵本は神宮文庫の一〇冊本の第三冊目に相当し、両者は返り点の有無等の若干の相違以外はほぼ一致している。

ところで神宮文庫蔵本で注目されるのは、第七巻目の次の跋文である。

碧巖集抄卷之七終

吾カ曹洞諸老之間ニ碧岩集ノ抄説多シ。其ノ最畫セル善者ハ祇陀大智之抄説耳。惜乎本抄於第七卷ニ独失脱セル也。學者往々病レ焉。愚留心於被抄中ニ久シ。之既ニ而會ハ其旨ニ雖未レ是承ニ其言ニ應ニ相似ニ因テ竊ニ為ニ義説ニ以足ニ祇陀和尚碧岩集第七抄之不足ニ者可レ謂鋼鑪ニ著ト生鉄ニ異日若有二本抄ニ出現セ麼久ハ此一巻以覆レテ醬口

矣。珍重。

天正七年解制日

自咲九拜

この跋文では一〇巻中この七巻目だけが欠落しており、天正年間に「自咲」なる僧が補ったものであるが、いずれにしても本写本は両写本の記述から大智撰として伝承されてきた写本であり、特にこの神宮文庫蔵本のこの跋文に曹洞系の『碧巖録抄』として伝承されてきたことが明示されている。

また、この神宮文庫蔵の写本は表紙裏打の古文書の延享四年の記載から「〔江戸中期〕写」とされるが、この延享の年号は表装した時期であつて、天正年間の写本ではないかと考えられる。ただこの『碧巖録抄』が大智の撰述であるかどうかについては問題が残るのであるが、現時点では臨済系ではなく、曹洞系の抄として位置づけられるべきであらう。

次に柳田氏のリストの「七、林宗和抄力碧巖抄」についてであるが、①土井洋一氏蔵（慶長八年写、一〇冊、写本）、②岸沢惟安氏蔵（書写年未詳、一〇冊）、③禅居菴蔵（五冊、上村觀光氏の『採訪録』に基づく）の三点を掲げられている。柳田氏はこれらについて未見ながらも三関齋（林宗和）による弘治二年の書写本の系統として位置づけられている。

この三写本の中、特に禅居菴所蔵本はその所在の確認もなされるべきであるが、筆者はこの中②の写本についてこれを岸沢文庫に所蔵されている写本を調査したので以下に報告したい。

この岸沢文庫蔵本は写本一〇冊で、各表紙に「（三関齋本） 碧岩抄」と

あつて下部に巻数が付記されている。第一〇巻の奥書に「弘治第二丙辰秋七月晦 三関齋書之」とある。なお、第三冊目巻頭に「起雲禪寺」の押印があり、第三巻の挿入紙（近代のもの）に奈良県宇陀郡大宇陀町所在する臨済宗大徳寺派起雲寺の名が記されている。本書の書写年代は不明であるが、比較的新しく近代の転写本と思われる。したがってこれは明らかに大徳寺系の『碧巖録抄』であり、柳田氏のリストの二二の「抄者未詳碧巖集古鈔」と同系統の写本であるが、同系統といつても二二とは別枠にすべきである。

この三関齋本と同一内容を有するのが、次の龍谷大学蔵の『碧巖録抄』である。本書は柳田氏のリストでは「二六、仮名抄であるかどうか未詳（一括）」の第一番目の「碧巖録抄 写（文明年間） 十冊 竜谷大学図書館蔵」に相当するものである。

『碧巖録抄』、龍谷大学蔵、写本、十冊、第一冊目の挿入紙に「慈照院本 碧巖録抄 全部拾冊 文明頃之古寫本」とあり、第十巻奥書に「〇^此碧巖録抄 寫本文明年間書 五山ノ相國寺内慈照院へ夏中人同伴譲受本 印」とある。

本書は弘治二年や三関齋の名を記した跋文を見ることはないが、三関齋本と同一内容である。

なお、この他にこの三関齋本と同系統の写本が岸沢文庫に所蔵されている。これは一〇冊本で表紙の外題に「註本碧巖」とあつてそれぞれ巻数が記され、界線があつて七行の罫線に書写されている。本書の抄文は三関齋本と同一であるが、抄全体を書写したものではなく、垂示と本則・頌古に対する抄が割注形式で記されており、本則の評唱

と頌古の評唱に対する抄は見られない。なお、第二則の冒頭に「天保六 七月十三日」とあるので、江戸後期の書写本であることがわかる。以上の如く三関齋本系の『碧巖録抄』の三つの写本について言及した。

三、関山派系の『碧巖録抄』について

ところでこれらの『碧巖録抄』は柳田征司氏のリストでも明らかなように多数の資料が見出されているのであるが、それらは必ずしもそれぞれが独立して成立しているのではない。その多くは、他の抄を影響を受けたり、あるいは転写したものであり、これらの資料はある程度のグループに分類することができる。すでにこの作業については、松ヶ岡文庫蔵については金田弘氏が前掲の研究において行ない、前出の柳田征司氏のリストにおいても整理づけられている。

まず金田弘氏による松ヶ岡文庫蔵の目録によると、『碧巖録抄』の中で関山派の写本は次のように整理されている。

○碧岩録抄、松ヶ岡文庫（クハ四）蔵、写本、一〇卷五冊

（1）碧岩抄、写本、一〇卷一〇冊（クハ三）

（2）碧岩抄、写本、一〇卷一〇冊（ハ一一三九）

○碧岩録抄、松ヶ岡文庫（クハ六）蔵、写本、一〇卷一冊

○碧岩集抄、松ヶ岡文庫（ハ一一四〇）蔵、写本、一〇卷一〇冊

（1）碧岩抄、松ヶ岡文庫（ハ一一四三）蔵、写本、一〇卷九冊

（2）碧岩抄、松ヶ岡文庫（クハ五）蔵、写本、一〇卷五冊

（3）碧岩集抄、松ヶ岡文庫（ハ一一四五）蔵、写本、一〇卷五冊
また柳田征司氏によって松ヶ岡文庫以外の写本をも含めて次のように整理されている。

「八、景聰興昂講大圭紹琢聞書碧岩集抄甲本」

①碧岩集抄、松ヶ岡文庫（ハ一一四〇）蔵、写本、一〇冊。

②碧巖抄、松ヶ岡文庫（クハ五）蔵、写本、一〇冊。

③碧巖録抄、花園大学図書館蔵、写本、一〇冊。

「九、虎哉宗乙講碧巖録抄」

①碧巖録抄、松ヶ岡文庫（クハ四）蔵、写本、五冊、天正二年写。

「一〇、景聰興昂講大圭紹琢聞書碧巖抄乙本」

①碧巖抄、松ヶ岡文庫（ハ一一四三）蔵、写本、九冊（一〇卷欠卷六）。

②碧巖集抄、東京大学文学部国語研究室蔵（二二A一二八）、写本、一〇冊。

一〇冊。

③碧岩集抄、岩瀬文庫（一四二一一八）蔵、写本、一〇冊。

「一一、抄者未詳碧巖録抄」

①碧巖録抄、駒澤大学図書館蔵（二四一一一〇）、写本、一冊（二〇卷存三卷）。

（二〇卷存三卷）。

「一二、抄者未詳碧岩抄」

①碧岩抄、松ヶ岡文庫（ハ一一三九）蔵、写本、一〇冊。

「一六、抄者未詳碧岩録抄」

①碧岩録抄、松ヶ岡文庫（クハ三）蔵、写本、一〇冊。

「一七、抄者未詳碧岩録抄」

①碧巖抄、松ヶ岡文庫（クハ六）蔵、写本、一一冊。

「一八、抄者未詳碧岩録抄」

①碧岩録抄、松ヶ岡文庫（ハ一一四五）蔵、写本、五冊。

今こうした先学の成果に基づきながらも、本稿では特に妙心寺派（関山派）の『碧巖録抄』について、改めてその系統の整理作業について検討するものである。この場合各写本の対照研究が不可欠となるものの、周知の如く『碧巖録抄』は膨大な文量であり、これらの文量をすべて写本について対照することは、複写することもできない資料も多くある現状において不可能である。しかしながら、全部分の対照するという途方もない作業はできないにしても、いくつかのサンプルの箇所を設定し、その対照から全体の系統がある程度把握できるであろう。そこで、以下において『碧巖録』に対する関山派（妙心寺）系の抄の中でも、いわゆる景聴興勗の講義に基づいたとされる「臆断」系の抄の各冒頭部分について検討してみたい。

この「臆断」系の『碧巖録抄』は、多くの写本が伝えられているものの、これらは景聴興勗の講義そのものというよりは、聞書をなした法嗣の大圭紹琢による付加部分が多く見られ、基本的な骨組みが同系統であっても写本によってかなりの相違点も見出せる。また「心宗」（「悟谿宗頓」、「仁岫」（「仁岫宗寿」、「玉浦宗珉」（玉浦）などの関山派の僧の言句がしばしば引用されており、これら「臆断」系の抄は重層的な構造を有するが故に、これらを分類整理することはかなり慎重に検討しなければならぬであろう。

筆者は特にこうした「臆断」系の抄の相違は関山派の中でも門派の相違、あるいは伝授された師資の系統に基づくと考え、特にこれらの抄に登場する関山派の僧の引用句についてポイントを絞って系統の試案を提示するならば以下のごとくである。

【臆断系A類】

①岩瀬文庫蔵本

この写本は序の抄では仁岫を引用するものの、他の関山派の僧をほとんど引用しない。内容的確度であって、抄としてわかりやすいものとなっている。本来の景聴興勗の臆断に近いものか。

【臆断系B類】

①松ヶ岡文庫 ハ一一四〇

②松ヶ岡文庫 クハ五

大仙寺旧蔵の前者を転写したものが後者である。花園大学図書館蔵もこれに近い。序の抄文では心宗・仁岫・玉浦・景聴の語が引用される。東海派（悟谿宗頓下）でも玉浦派によって成立したものと考えられる。

【臆断系C類】

①松ヶ岡文庫（ハ一〇四三）蔵本

②東京大学文学部国語学研究室所蔵本

③松ヶ岡文庫（クハ四）蔵本

古田紹欽氏によって乙本とされたもの。①と②の両者はかなり一致する。大宗の引用が特徴的であり、天縦派によって成立したものと考えられる。③のクハ四は①と②に似た内容を示している。

【臆断系D類】

① 松ヶ岡文庫（クハ三）蔵本

② 松ヶ岡文庫（ハ一一三九）蔵本

心宗・玉浦・道樹・大宗 太宗が多く引用されている。天縦派によって成立したものと考えられる。特に序の抄で惟宗和尚の引用や東陽英朝の「堆雲夜話」の引用などが特徴的である。

【その他の臆断系】

① 駒澤大学図書館蔵（一四一―一一〇）の写本は最初は漢文抄で特に関山派の僧の引用などは見られない。

この他の松ヶ岡文庫ハ一〇四五の写本は、「臆断」系のもではない。

ところで、これら「臆断」系の『碧巖録抄』の冒頭には他の公案集の抄と若干ことなり、独特の文章が存在するのであつて、今東京大学文学部国語学研究室所蔵本でみるならば以下のごとくである。（一）は筆者）

【A】

○ 棲伽 竺仙和尚院号也。南禅寺有之。

○ 木杯 椿庭和尚軒号、南禅寺之有之諱寿。或云、椿庭和尚院号東福之三聖有之。蓋両处有之歟。或云異号椿庭者竺仙ノ真子。

○ 不二 岐陽和尚庵号、東福栗棘菴有之。諱秀。

○ 黒河 月菴和尚大安開山訢松堂ノ師也。

○ 郷 事苑ノ注ヲスル人。

【B】

○ 洛陽照覺禪師從傳灯録中抜百則公案行世者即来真宗天禧年中也。

○ 雪豆頌、此百則者宋特徽宗政和年中也。

○ 佛果評唱雪豆頌古者宋高宗建炎年也。

○ 関友無量記焚毀已前也。前普照序亦焚毀已前其外諸人口皆焚毀已後也。

○ 三武 後周武 後魏武 唐武宗 共毀佛法帝王也。

三武之君以テ（中略）

【C】

○ 中峰山房夜話、或問宗門註有下碧岩集ト云者上、乃円悟住セシ夾山ニ時、取テ雪豆頌古一分レ網ヲ列レ要ヲ、言批句ノ判メ拳揚細密、開發詳明ナリ語ニ其ノ富麗ナル則シハ如シ下揚ニ開シ宝聚一ヲ、而明珠大具、委積橫陳スルカ上、語其充隘則如掣ニ断ノ禹門ヲ、而逆浪回瀾、掀昂起伏上カ、偉オハナ矣哉、非シハニ得レ法ヲ自在者ニ、不レ可レ及矣奈何下自ラ開ニ戸一鋪一之士、毎ニ資タスケトモレ此ヲ為ニ中ニ階級一ト上、尋ツテ而妙喜知レテ之恐ニ學者流テ而忘コト一返コト一、嘗テ入レ風ニ碎ニ其板一ヲ、今書坊仍復刊シ行フ、丁ニ茲ノ季運ニ、無ニ乃益コトニ一學者ノ穿鑿ヲ乎。幻曰、非也。無辺ノ衆生各々脚跟下ニ有ニ一則現成公案一、靈山四十九年、詮註シ不出達ハ萬里西来テ指点シ不レ破至テモレ若ニ德山臨濟ノ換索不着一ルカ。此又雪豆能ク頌シレ而円悟能判スル者ラン哉。縱シテ使シテ上ニ、一ヘニ何加損セム焉。昔ムカシ妙喜不レ窮レ此理ヲ而シ碎ニ其板一大似リ禁ルニ石女之勿ト生レ兒也。今復刊ニ此板一之士、將ニスル有レ意下ニ於攬掇石女一之生ルニ上兒ヲ乎。益可笑也。曰、然則當人脚跟下ノ見成公案、

了ツ不ル時ハ与二仏祖ノ言教ノ一、有中交渉上。則ス當人何ノ所アツテカ（中略）
如ハ下世尊以二正法眼一、洞ニ觀スルカ法界衆生ヲ上、各々具ニ有ニ如来ノ智惠
德相、但以妄想執着、不レ能證得一我當下教ルニ以二聖道ヲ一令ム离中諸
著上云々。

【D】

△雪豆一百則 ○大恵武庫峨嵋山ノ白長老嘗テ云、郷人ノ雪豆有下頌百
余首上、其ノ詞意不ニ甚タ出テ人ニ何ソ乃浪ニ得ニ大名於世ニ遂ニ作ニ頌千首一
以ニ多コト十倍一為レ勝スクレタリ自編ノ成レス集、妄ニ意ニ他日名厭シコトヲ雪
豆一。到处ニ求ム人ノ賞音ヲ。（中略）到ニ成都ノ大慈寺ニ、大ニ書ニ於
壁ニ云、峨嵋ノ白長老ノ千頌、自ラ成レ集ヲ大和曾テ有レ言ヘルコト鴉臭ノ當レ
風ニ立ツト。

【E】

△明州雪豆山資聖禪寺ノ第六祖明覺大師塔ノ銘、呂夏郷撰曰、禪師諱ハ
重顯、字ハ隱之、大寂九世之ノ孫也。智門ノ法嗣也。俗姓ハ李氏、母ハ文
氏。（中略）雲門識シテ曰ク、二百年後吾道重顯即師之名也。

【F】

△碧岩序之臆斷

○杭 胡剛切 句會 寒剛切 カウノ声也。 然レトモ、ワウトヨミ
ツケタ。○書隱軒号、出院也。○印行

宗門第一書 百川聚ニ于海ニ。曰ニ朝宗ト。万法皈ニ乎心ニ。曰ニ祖宗ト
也。此ノ五字誰カ語ト云事ヲ不レ知。版行スル人ノ語乎。○仁岫云、宗者自
經出ツトモ禪ヲ宗ト云ベキ也。言ハ一心ヲサシテ簡要ト云義ソ。○
門ハ人ノ家ニナクテハカナワヌモノ也。門ヨリ入テ門ヨリ出ルハ簡要ソ。

諸宗雖レ多ト、禪宗バカリ迦葉以來ノ傳也。詳ニ于正宗記ニ。○第八居
也。家也。○一ハ初也。一ト初ル処ハ縦ヘハ縁ノ邊ナルヘシ。序ト云モ
初也。東序西序ト云モ樓家ノヤウナル処ヲ透テコソ奥ノ座敷ヘハ可レ行
也。又仁岫云、碧岩ヲモ三処テアツメラル、或ル説ニ碧岩院ト云処
ニテアツムル故ニ碧岩ト云。此碧岩ノ外ニ新碧岩、續碧岩ト云アリ。
景聰云、有レ出処歟。仁岫會中ニ可レ知レル之ヲ請可レ問レ之。○標的ハ標樣
也。西国ノサカイニ幡ナドヲタツルヲ標樣ト云ソ。杜ガ詩ニモ標ス天
地ノ濶ト云。是レモ仁岫ノ義也。心宗云、張明遠力辭トミヘタ也。標
ハ本ノ末也。標準也。標識也。識ハ坤志切也。（中略）

無辺ノ——不レ尽——、此詩ハ寒山子ノ所作也。シカレトモ寒山詩三百
余首内ニハ不レ見。玉浦云、此ノ頌ハ開板化縁ノ方ヘミルヘシ。言ハ眼
——灯外——ハ心宗云、正法眼藏ヲサス。此ノ出ヲ云也。聰云、眼
——灯——是レ什物ソ。○柳暗——是則眼中ノ——灯——也。十万
戸ヘ立ヨツテ開板化縁ト云テ○敲門——主人公歷々分明也。○又円悟
心法——得テ希有一發ニ久秘一ヲレハ、森羅万象悉皆円悟心法也。○仁
岫云、無辺風月カ即是眼中ノ眼也。○不レ尽乾坤カ即是灯外——也。○
柳暗花——言、録中ノ列祖ノ門頭戸底、或柳暗花明把住放行、歷々分
明ナ。十万戸ハ拳ニ大数ニ也。門々戸々マテソ。○敲門処々——サテ
撥草瞻風ノ學者共カ敲門々々、無レ不レ築ニ着主人公ニ也。一二ハ寒
山。三四ハ張明遠ノ作也。

【G】

○至聖、至ハ——極、聖ハ三世ノ諸仏也。○仁岫云、至極ハ言語道斷ノ
処、天地未分ノ処也。抄云、從ニ七仏ニ至ニ釈迦ニ、次第傳授、皆是究

竟円満ノ仏也。至ハ是ヨリ上ハナイ義。○命脈、此ノ録ハ三世仏ノ□命血脈也。(中略)

△二序 ○自二十四——、小乗ノ經也。后漢明帝ノ時、天竺ヨリ始テ渡ル也。詳ニ于編年通論藏經辭字ノ箱ニ、漢ノ明帝夢ニ紫金身ヲミル。使臣相レ之。臣云、西竺ニ仏經アリ。滅後千年ノ後漢ヘ渡サントアリ。考テ見ルニ、千年ニナル。定テ此ノ經西竺ヨリ渡ント云間、迎ヲヤレハ案ノ如ク騰藍持来也。明帝喜レ之時ニ儒者仙人出テ曰、禁中ヘ仏肉舍利ヲハ入マイト曰ソ。……

△三序 ○碧岩——此序ハ無眼師出ル大惠忌ニ執着ニ焚ト云。大ニ惡也。大惠ノ心ハサデナイ也。○釈子——仏ヲモ罵ル也。○有レ我——、我ハ本我也。常樂我淨ノ我。天上天下——我也。彼ハ執着ヲサス。由レ我——見「或ハ彼ハ文字言句ヲサス。此ノ一段ハ言句ヲステ、至得スル牀也。(後略)」

通常『碧巖録』の抄は【G】の序文に対する抄が始められるのであるが、これらの「臆断」系の抄によくみられる特徴として、【A】のように、五山派において『碧巖録』の權威ある抄を残した竺仙梵僊等の僧名を列举した部分、【B】汾陽善昭と雪竇重顕の公案百則や圓悟克勤の碧巖撰述に関する記事、【C】中峰明本の『山房夜話』に関する記事、【E】雪竇重顕の塔銘に関する記事、【F】五山版の扉に記される「宗門第一書」云々の句に対する抄がしばしば記されている。

(1) この二つの写本については拙稿「中世禪宗における語録抄の諸

形態」、『印度学佛教学研究』第四七卷第一号、(平成一〇年二月)、拙著『中世禪宗文献の研究』三六六頁に言及した。

(2) 拙稿「中世禪宗における語録抄の研究(一)——『碧巖録』の抄を中心に——」(『駒沢女子大学研究紀要』第五号、(平成一〇年十二月))